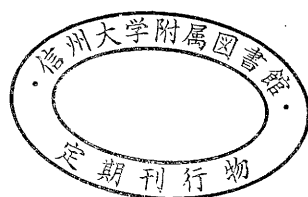


長野県松本市

*OKANOMIYA*

# 岡の宮遺跡

—第2次発掘調査報告書—



2008.3

松本市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、平成19年5月7日～28日に実施された松本市女鳥羽3丁目ほかに所在する岡の宮遺跡第2次発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は長野県松本建設事務所 奈良井川改良事務所による災害復旧工事に伴う緊急発掘調査報告書であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書には、女鳥羽川河川敷内の近接地点において、河床に露出した遺構の記録保存を目的として同時期に実施した岡の宮遺跡D地点、女鳥羽川遺跡6次調査、さらに昨年度実施した同遺跡5次調査について、一連の調査としてその成果を併載した。
- 4 本書の執筆は、III-3-(1)：直井雅尚、III-3-(3)：横井 奏、その他を竹原 学が行った。
- 5 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子

鉄器処理：洞澤文江

土器接合・拓影：竹平悦子、前沢里江

遺物図版作成：直井雅尚、横井 奏

土器実測・トレース：白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、八板千佳

遺構図トレース：村山牧枝

石器実測・トレース：横井 奏

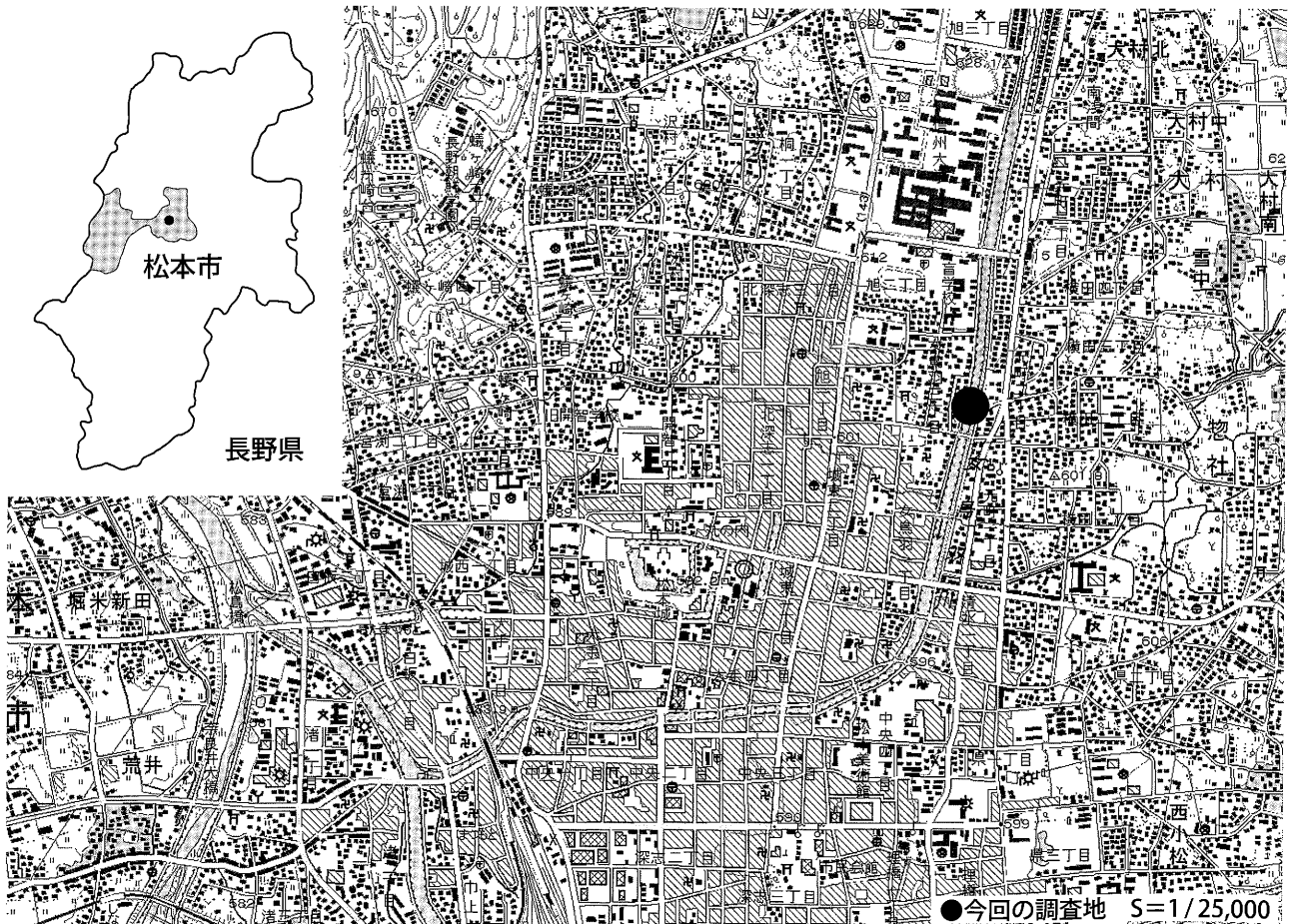
総括・編集：竹原 学

- 6 本書で使用した略称は以下のとおりである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝

遺構図面上でのピットの番号は、単独のものを「P1」、遺構付属のものを「P<sub>i</sub>」のように記し区別した。

- 7 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵している。



第1図 調査地の位置

# 1 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

岡の宮遺跡は松本市旧市域（旧松本城下町）の北東、岡宮神社を中心とする地域に広がる遺跡で、平成12年の第1次調査を皮切りにその後の周辺での開発行為に伴う試掘・立会い調査等によって実態が徐々に明らかになりつつある。

こうしたなか、平成18年秋の集中豪雨による女鳥羽川の増水により、浅間橋付近から下流域にかけての河床や堰堤等の施設が浸食、流失等の被害を受け、早急に復旧工事を実施する必要が生じた。この事態を受け、河川の管理者である長野県では平成19年度の県単河川災害復旧工事として浅間橋～桜橋の間の数箇所における河床の浸食防止や護岸工事を実施することとなった。

一方、その主たる施工予定区間である松本市女鳥羽3丁目の曙橋～元町橋間は岡の宮遺跡の東縁部にあたり、平成18年度の集中豪雨では元町児童遊園西側から元町橋下流側にかけての河床に弥生時代中期の遺構や包含層が露出していることが現地踏査で確認された。特に元町橋下流側の女鳥羽川遺跡北縁部では遺構の流失が懸念され、松本市教育委員会では長野県と協議し、平成18年度市単事業として発掘調査を実施した（女鳥羽川遺跡第5次調査）。また、平成19年度に実施が予定される災害復旧工事の施工箇所のうち、1箇所において遺物包含層の露出が認められたため、工事による掘削に先立ち記録保存を講じる必要が生じた。

そこで、松本市教育委員会は事業実施担当である長野県奈良井川改良事務所と協議し、当該箇所の掘削工事に先立って発掘調査を、その他の施工箇所についても工事立会いを実施することで合意した。これについて、松本市は長野県松本建設事務所長と平成19年5月1日付で発掘調査委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘調査の実施と調査報告書刊行を行うこととなった。発掘調査は平成19年5月7日～28日にかけて実施し、結果として立会いによる追加を含めて3地点（岡の宮遺跡第2次調査A区～C区）を調査した。調査終了後、平成19年5月29日に松本警察署に埋蔵物発見届を提出、平成19年6月5日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。また平成19年6月12日付で長野県教育委員会に終了報告書を提出し現地の調査を完了した。調査後は引き続き出土遺物および記録類の整理作業を実施し、本報告書の作成にあたった。

なお、今回の調査に際し、災害復旧工事の対象とはならない数箇所の河床において遺構の露出が確認され、そのまま放置すると流失する恐れがあった。そこで松本市教育委員会では単独事業として元町橋より上流側の岡の宮遺跡、下流側の女鳥羽川遺跡それぞれ1箇所（岡の宮遺跡D地点、女鳥羽川遺跡第6次調査地点）について発掘調査を並行して実施した。後者は第5次調査地点の西に続く範囲である。

## 2 調査体制

**調査団長** 伊藤 光（松本市教育長）

**調査担当** 竹原 学（文化財課主査）、横井 奏（同 嘱託）

**調査員** 宮嶋洋一

**協力者** 笹井トキ子、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、白鳥文彦、洞澤文江、前沢里江、待井敏夫、村山牧枝、本木修次、百瀬二三子、八坂千佳

**事務局** 松本市教育委員会 教育部 文化財課

宮島吉秀（課長）、上嶋乙正（部課長）、横山泰基（埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、関沢 聡（主査）、櫻井 了（主事）、柳澤希歩（嘱託）

## II 遺跡の環境

### 1 遺跡の位置と地形

松本市女鳥羽3丁目に所在する岡の宮遺跡は、旧松本城下町の北東、北深志の鎮守である岡宮神社を中心とした地域に位置している。この遺跡は平成12年に新発見の遺跡で、今後の調査事例の蓄積により範囲・内容を検討していく必要がある。これまでの調査事例から見る限り、現時点で遺跡は標高600～610m、女鳥羽川右岸から河川敷にまたがる南北420m×東西450mの範囲に広がっているものとみられる。

遺跡は、地形的には女鳥羽川の扇状地上、南南西方向の緩傾斜面にある。これを仔細にみると、遺跡は女鳥羽川と平行に伸びる微高地上にあり、西側に広がる旧城下町より幾分小高い場所であることがわかる。その頂部に現在の女鳥羽川があり、左岸側では湯川が開析した緩い谷状の地形に接している。

次に、遺跡付近の地質について。女鳥羽川遺跡第5・6次調査を含め今回の調査範囲では、弥生時代の地山は黄褐色を呈するシルト質土であった。この土壌は女鳥羽川の堆積層のひとつとして上流域の岡田地区まで広く分布し、時に垂円礫を含みながら流れの方向に沿って、砂礫層とともに凸レンズ状の堆積を繰り返している。岡田地区から本遺跡付近まで、流域の遺跡の多くはこの土壌が広がる段丘や微高地上にある。しかし、今回調査地点より下流130mの護岸工事箇所ではこの土壌はみられず、黒褐色と灰褐色の粘質土やシルトが厚く互層をなす湿地性の堆積に移行していた。また、調査地点の西側でもこの土壌は間もなく途切れ、砂礫層等を介して西側は暗褐色粘質土や礫混じりのシルトが広がっているようである。

蟻ヶ崎丘陵の東縁を流下する大門沢川や、そこから女鳥羽川までの間に南から西へと弧状に幾筋か繰り返す微高地と谷状の地形は、女鳥羽川の旧流路の痕跡といわれている。その変遷過程は大局的には蟻ヶ崎丘陵側から東側へと遷移していったと解釈されているが、その時期を巡ってはさまざまな見方がある。最終的に現在の位置に河道が定まったのは、戦国時代末期の松本城形成期において大規模な人為的変更が加えられた結果によるものといわれている。本遺跡では弥生時代の集落遺跡が、後になって河道に分断された状況を呈していた。集落形成期に女鳥羽川本流がどこにあったのか、その位置を明らかにするまでには至らなかったが、今回の調査は女鳥羽川の変遷を考える上でひとつの示唆を与えたといえることができる。

### 2 歴史的環境

#### (1) 岡の宮遺跡の過去の調査

岡の宮遺跡発見の端緒となった平成12年の第1次調査は、マンション建設に伴って女鳥羽川の西200m、岡宮神社に北接する地点を調査したものである。その結果、267㎡の調査範囲から暗褐色土層を掘り込む古墳時代前期の竪穴住居址4棟、平安時代の竪穴住居址3棟、時期不明の竪穴住居址2棟が検出され、密度の濃い集落遺跡の一角であることが判明した。

その後の遺跡周辺における試掘・工事立会い調査では、遺跡の範囲を追求することが目的のひとつとなっている。古墳時代前期集落址の広がりについては、平成19年6月に立会い調査を実施した大安楽寺境内(第1次調査地点の南255m・女鳥羽川の西85m)で当該期の遺構・遺物の出土があった。岡宮神社東側における2箇所の立会い調査では遺構・遺物の出土がないが、この付近まで広がっている可能性がある。

遺跡の西限については神社の西、女鳥羽川から380mにある2件の立会い調査地点付近を想定している。これらの地点では暗褐色土層中に古代の住居址や包含層が確認されている。遺跡の北限については、第1次調査地点より北側、旭町小学校正門付近では今回と同様な黄褐色シルト質土を確認したが遺構・遺物の出土はなく、遺跡の北西範囲外とみられた。旭町小学校と松本盲学校の間における2件の立会い調査では暗褐

色シルト層中から古代の遺物を得ており、現段階ではこの付近が北限ではないかとみている。

最後に東限について。今回の調査で弥生集落が左岸まで広がるのが事実となった。元町橋北側の左岸堤防脇の店舗建設地点では河床礫層を確認したが、下層の状況は不明だった。女鳥羽川の東、元町地域は古くからの住宅密集地でかつ地山層が深いため、遺跡の広がりには明らかではないが、横田古屋敷遺跡では現地表面下2m近い深さに岡の宮遺跡と同様な黄褐色シルトが広がり、やはり弥生時代中期後半の礫床墓群と竪穴住居址が検出されている。先にも触れたように、女鳥羽川旧流路がどこにあったのか課題は残るが、両遺跡の関係が注目される。

## (2) 周辺遺跡 (第2図)

岡の宮遺跡周辺の遺跡分布については、大きく5つの地域に分けて捉えることができる。ここでは弥生時代を対象を絞って概観する。

### ア 大門沢川流域

この地域では縄文時代早期から古代までの遺跡が分布している。弥生時代の遺跡としては西大門沢川左岸の沢村北遺跡(148)から遺物が採集され、第2図に示した範囲からは外れるが、右岸の城山腰遺跡は古くから知られている規模の大きな遺跡である。さらにその西、奈良井川右岸には中期後半から後期にかけての大きな集落址である宮渚本村遺跡がある。

### イ 女鳥羽川左岸微高地

この一帯の微高地には大輔原遺跡(75)等、古墳時代後期～古代の集落が広範囲に広がっている。弥生遺跡はその東側のやや低まった地帯に大村(73)、大村古屋敷(74)、大村前田(77)等の遺跡が南北に連なり、大村古屋敷遺跡では後期の住居址が検出されている。

### ウ 女鳥羽川右岸・同下流域

城下町時代以来の整地層やそれ以前の女鳥羽川の堆積層に覆われ、遺跡の分布状況がよくわからない地域である。位置的には本遺跡もこの領域に含まれる。近年、本遺跡南西の片端遺跡(500)において中期初頭の住居址が検出された。また、丸の内遺跡(158)、大名町遺跡(159)では縄文時代後期の生活面や遺物が出土しており、低湿地の広がる現市街地のわずかな微高地に縄文時代終末期から弥生時代中期前半期の未確認遺跡が存在する可能性を示している。

### エ 湯川流域

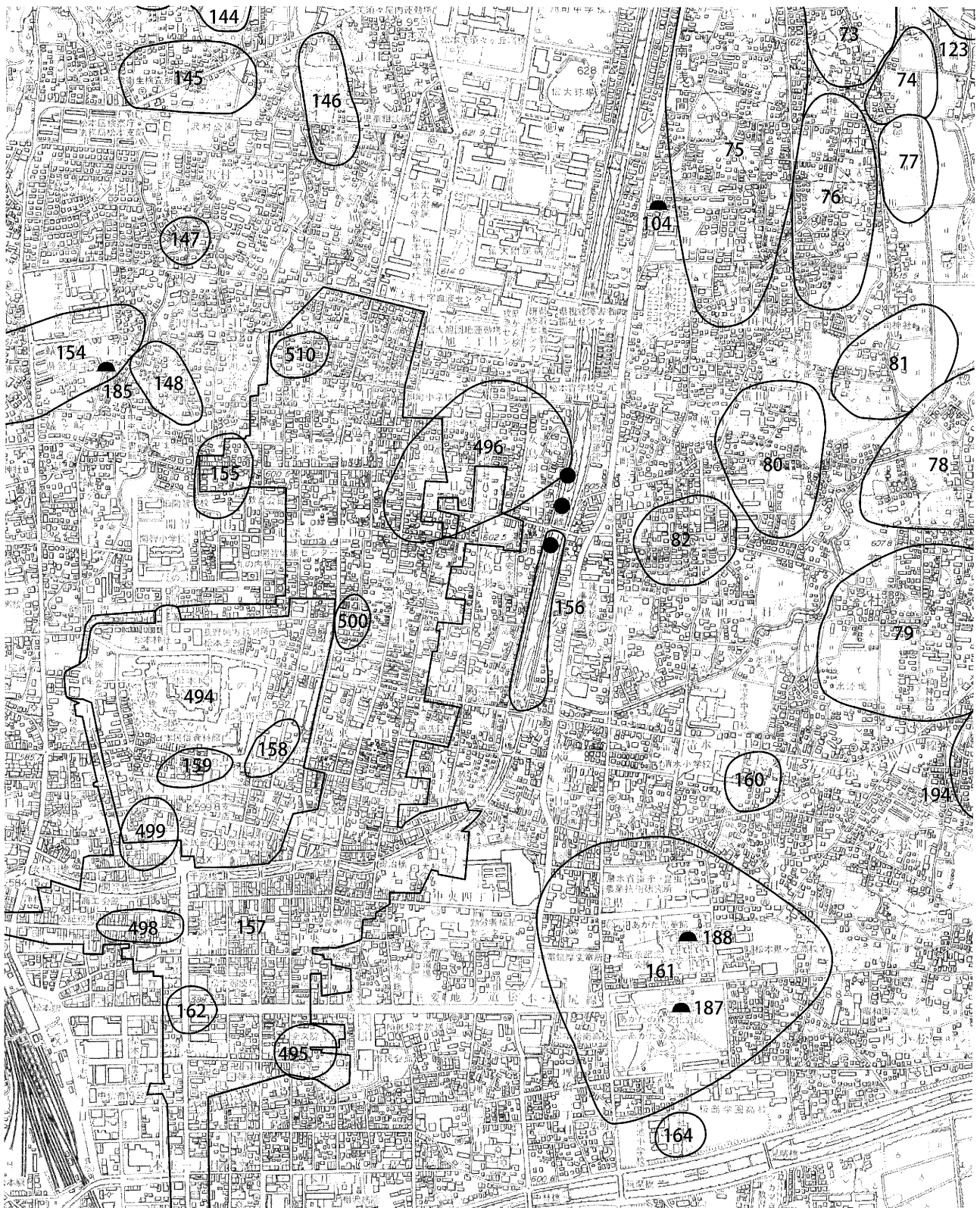
女鳥羽川扇状地と薄川扇状地の接する一帯である。縄文時代中期から古代まで大きな広がりをもつ遺跡が分布する。弥生時代では先に触れた横田古屋敷遺跡(82)、四ツ谷遺跡(160)などがある。湯川河口付近の女鳥羽川遺跡(156)は縄文時代晩期の生活面が確認され多量の遺物が出土しているが、上流側、今回報告している第5・6次調査地点も便宜上同遺跡に含めている。

### オ 薄川扇状地

扇端に位置する県町遺跡(161)は広範囲に弥生時代中期後半から古代までの集落址が広がり、この地域では最も規模の大きい遺跡である。

### カ まとめ

松本市街地での弥生時代遺跡の分布状況を集約すると、白板付近を最低とする市街中央部の低湿地を囲んで、東から北、北西にかけての概ね標高600m前後に宮渚本村、城山腰、横田古屋敷、県町などの大きな集落址が分布する状況が看取される。今回報告する岡の宮遺跡A区～D区、女鳥羽川遺跡第5・6次調査地点もこの線上に位置する一連の遺跡といえる。こうした点を踏まえ、今後弥生集落の実態解明と遺跡範囲・名称の再構築が必要と考えられる。



●印：調査地点 No.：松本市遺跡台帳記載の遺跡番号 S=1/15,000

73 大村遺跡	74 大村古屋敷遺跡	75 大輔原遺跡	76 大村立石遺跡	77 大村前田遺跡
78 惣社遺跡	79 宮北遺跡	80 横田遺跡	81 大村塚田遺跡	82 横田古屋敷遺跡
123 新切古窯址	144 狐塚遺跡	145 旧射の場西遺跡	146 元原遺跡	147 沢村北遺跡
148 沢村遺跡	154 蟻ヶ崎遺跡	155 田町遺跡	156 女鳥羽川遺跡	157 松本城下町跡
158 丸の内遺跡	159 大名町遺跡	160 四ツ谷遺跡	161 県町遺跡	164 埋橋遺跡
162 本町南遺跡	194 下原遺跡	494 松本城跡	495 天神西遺跡	496 岡の宮遺跡
498 伊勢町遺跡	499 土居尻遺跡	500 片端遺跡	510 堂町遺跡	
104 国司塚古墳	185 饅頭塚古墳	187 県塚1号古墳	188 県塚2号古墳	

第2図 周辺遺跡

# III 調査結果

## 1 調査の方法と概要

### (1) 調査地点と調査経過

今回の調査地点は、いずれも河床礫が遺物包含層や地山面を覆っていた。その厚さはせいぜい数 10cm ~ 1m 程度であり、堰堤の下流側などでは落下水の影響により地山がえぐられている状況もみられた。とりわけ平成 18 年秋の増水により、今回の調査地点から下流側、元町橋を越えて女鳥羽川遺跡にかけての広い範囲で河床面が浸食を受け、遺物包含層が露出していた。

そこで、今回の河川災害復旧工事に伴う発掘調査では、工事が予定された 6 箇所のうち、遺物包含層への掘削が確実な右岸の 1 箇所について調査対象（岡の宮遺跡 A 区）とした。その後、立会い調査により河床礫下から弥生時代の住居址が見つかった右岸側 67m 下流の地点（B 区）、その東、左岸側施工予定地点に遺構の露出が認められた C 区を加え、合計 3 箇所の調査を実施することになった。

さらに前章でも触れたように、今回の施工に伴う 3 箇所のほか、河床に遺構が露出していた 2 箇所、すなわち元町橋より 43m 下流の地点および岡の宮遺跡 C 区南側の地点についてもそれぞれ女鳥羽川遺跡第 6 次調査地点、岡の宮遺跡 D 区として調査を実施した。

### (2) 調査方法

各地点ともに河床礫の除去（重機または人力）、遺物包含層の掘削（重機または人力）を経て、地山の黄褐色土層面において遺構検出作業を行った。遺構は、包含層と同様暗褐色土を主体とするため、その把握は容易であった。遺構の番号は第 1 次調査からの連番とし、記録は各地区任意の座標を設定し測量を行った。

調査終了後、B・C・D 区では検出された住居址が調査区外に広がるため、その後の浸食による破壊を防ぐため土嚢袋、礫等で保護した。また、各地点に設定した任意の座標基準点は、最寄りの国家座標既知点から値（世界測地系）を導いた。

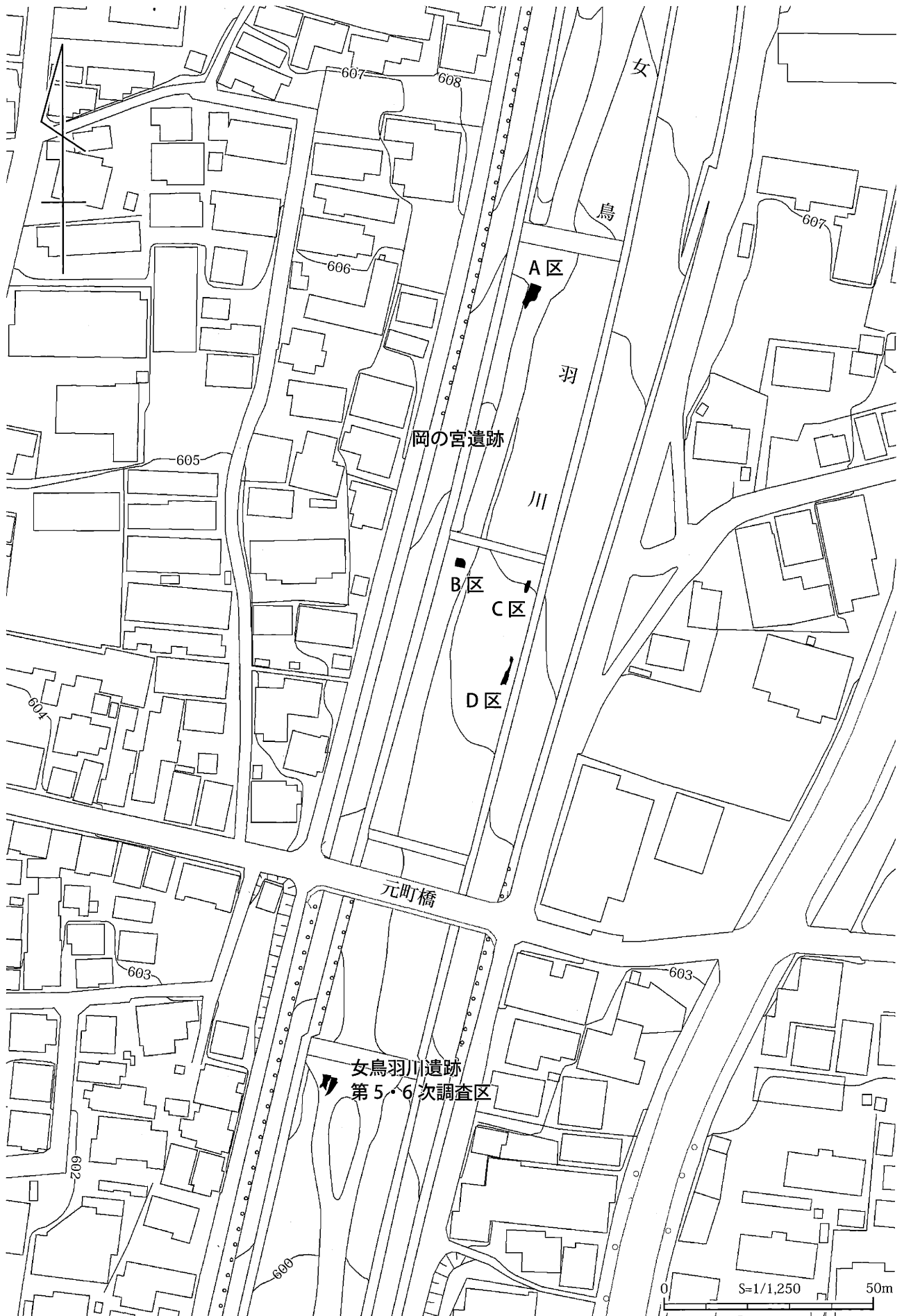
### (3) 基本土層

既に述べたように、今回の調査地点はいずれも河床礫が遺構面を覆っていた。その下位には、浸食が弱い箇所では遺物を包含する粘性の強い暗褐色～黒褐色土が、浸食の強いところではさらに下位にある地山の黄褐色土が不整合面をなして堆積している。この土層はシルト質で礫を含まないが、湿った状態では粘性が非常に強い。今回調査した遺構はこの層中に掘り込まれる。岡の宮遺跡 B 地点において層厚は 50cm ほどを測り、下流の女鳥羽川遺跡調査地点でもほぼ同じである。この層の下位には粘性の強い暗褐色土層が 50 ~ 60cm の厚みで広がり、炭化物が散在するものの遺物や礫はまったく含まれていない。岡の宮遺跡では住居址の柱穴等一部の遺構がこの層まで達している。女鳥羽川遺跡ではその下位に黄褐色土層が観察された。

女鳥羽川遺跡調査地点の下流 130m の地点における掘削工事箇所ではこうした土層構成が一変し、灰褐色や黒褐色の粘質土が繰り返す湿地性の堆積になっている。この状況はさらに下流、桜橋付近の縄紋後晩期を主体とする女鳥羽川遺跡第 1 ~ 4 次調査地点を含め、市街地（旧松本城下町）一帯に及んでいる。

第 1 表 調査結果一覧

遺 跡	調査次・区	調査面積	調査原因	検出遺構	出土遺物
岡の宮遺跡	2次A区	25.3 m <sup>2</sup>	河川災害復旧工事	土坑 3 基、ピット 2 基、溝状遺構 1 条	土器
	2次B区	3.1 m <sup>2</sup>		竪穴住居址 1 棟	土器、石器
	2次C区	3.4 m <sup>2</sup>		竪穴住居址 1 棟、ピット 2 基	土器、石器
	D 区	6.9 m <sup>2</sup>	河川による流失	竪穴住居址 1 棟、土坑 2 基、溝状遺構 1 条	土器、石器
女鳥羽川遺跡	6 次	7.9 m <sup>2</sup>		竪穴住居址 1 棟、溝状遺構 4 条	土器、鉄製品、石器



第3図 調査区の位置



## 2 遺構

### (1) 岡の宮遺跡 (第4図)

#### ア 竪穴住居址

##### (ア) 概要

B・C・Dの各地区から1棟ずつ、計3棟が検出された。いずれも地山である黄褐色シルト層中に床面を設け、平面形状、出土遺物の様相から弥生時代中期後半に帰属するものである。また、遺構の各所が河床礫による浸食を受けていたり、調査対象外に広がっている等の理由で全体を調査したものはない。

##### (イ) 第12号住居址

B区の立会い調査中に河床礫下から発見され、急きよ面的調査に及んだものである。径4m程度の円ないし楕円形を呈する竪穴住居址と推定される。河床礫による流失や施工範囲外への広がりなどにより、実質的な調査は北東部の約4分の1、南北1.73m×東西1.95mの範囲にとどまった。

遺構の掘り込みは明瞭で、ほぼ垂直に立ち上がる壁の残存高は最大33cmを測る。床面は黄褐色土をよく叩き締めて貼り、壁下には周溝が巡る。この当初の床面上には黄褐色土を3cm程貼るもう1枚の床面が存在する。床面中央からは地床炉が検出されたが、その掘り込みは新しい床面からである。炉は約4分の1を調査し、底面はよく焼けるが炭・灰の堆積はほとんどない。東北隅の床面からは楕円形の浅いピット(P1)と主柱穴であるP2が重複して検出された。P1は床面が浅く落ち込み、床面レベルに壺の口頸部が残されていた。P2は厚い貼床を除去した段階で輪郭が捉えられる。径46×30cm、深さ58cmを測り、楕円形に広がる上半には柱の抜き取りに伴う再堆積、下半には柱痕が認められる。柱痕・柱穴は内傾し、中層には甕底部(第6図17)が遺存していた。ピットは他に周溝底面や壁面にも2基が存する。

覆土と遺物の出土状況は特徴的である。断面観察の結果、覆土の堆積は複雑な状況を呈しており、炭化物や焼土塊を多量に含む黒褐色土(第VI層)が中央部の上層に広がり、この層を中心に復元可能な土器片や石器類が分布していた。下層や壁際の堆積も漸移的な自然堆積とは様相を異にしている。

遺物は土器(壺・甕・鉢等)、石器(磨製石鏃未成品・有肩扇状形石器・スクレイパー・石核等)がある。

##### (ウ) 第13号住居址

東部を浸食され、遺構の大部分が西側の分厚い河床礫下にあるため、南壁と床面のごく一部、南北1.76m×東西36cmの範囲を調査するにとどまった。壁高10cm内外、床面は黄褐色土の叩き床で壁下に周溝が巡る。ピット2基が検出され、このうちP1は長径25cm・深さ35cmで柱痕の明瞭な柱穴である。

遺物は覆土中およびP1内から土器片が少量出土した。

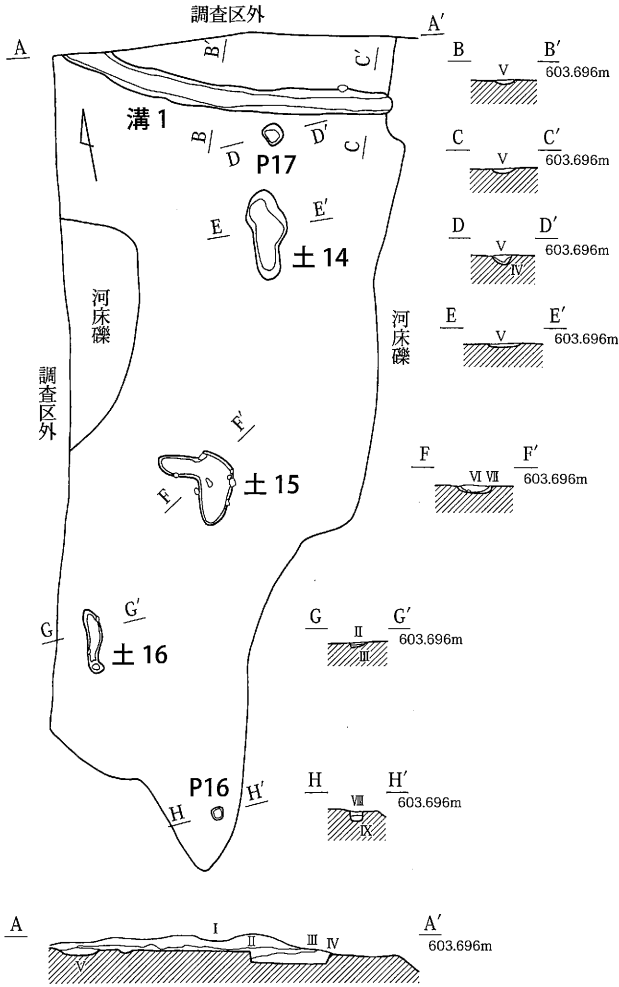
##### (エ) 第14号住居址

13住と同様西側は未調査、東～南は河床礫で失われ、南北3.35m×東西1.4mの範囲を調査したにすぎない。炉と壁の位置関係から南北方向の径は5.4m程と推定される。厚さ10cm内外の覆土は中央部にかけて徐々に暗色となり、炉の北西、床面より5～10cm浮いた範囲に復元可能な多量の土器片、扁平片刃石斧等が遺存していた。床面は黄褐色土を貼り、炉の周辺では非常に固い。浅い皿状の地床炉は被熱硬化が著しい。その他北壁より80cm程内側には浅い溝が走る。壁下から溝周辺には4基のピットが存在するが、いずれも浅く主柱穴とはいえない。遺物は土器(壺・甕)、石器(扁平片刃石斧、太形蛤刃石斧片等)がある。

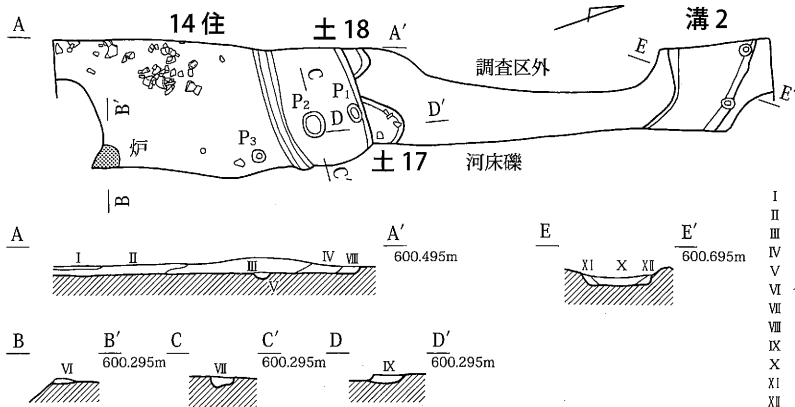
#### イ 土坑

A区3基、D区2基が検出された。A区の土14～16はいずれも地山面の微妙な凹凸を土坑として捉えた可能性が高く、壁・底面は不鮮明である。いずれも長径70～95cm、短径15～40cm、深さ10cm程度で、

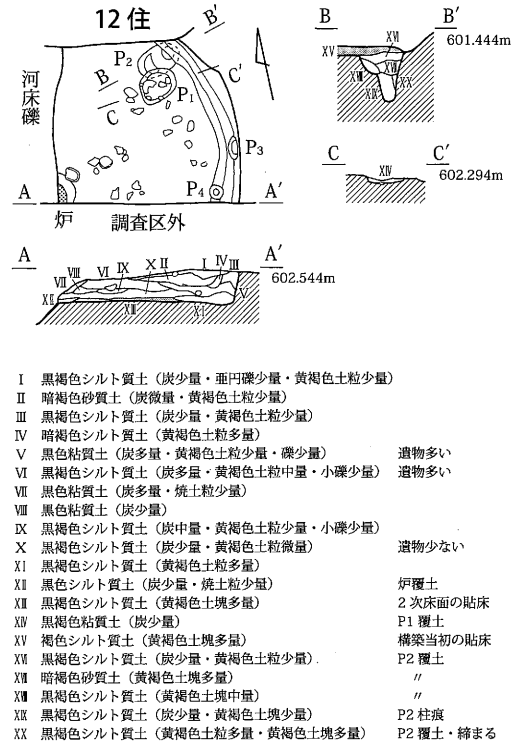
A 区



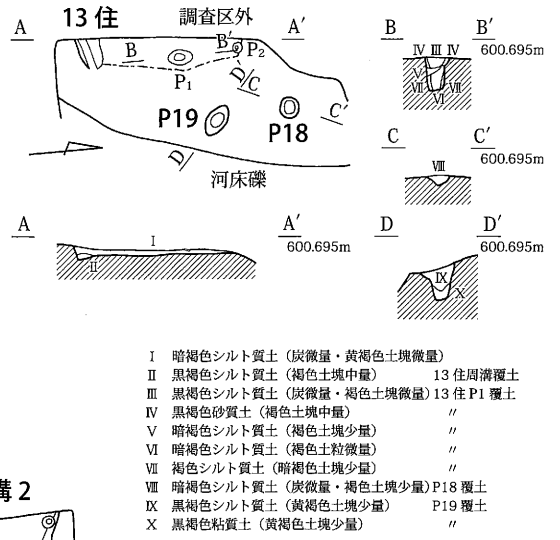
D 区



B 区



C 区



第4図 岡の宮遺跡検出遺構

南北に細長い不整形を呈する。遺物は出土していない。

対してD区の土17・18は遺物が伴い、遺構として明確に捉えられる。ともに14住に南側を切られる楕円形の土坑と考えられる。覆土は14住と見分けが付き難く、断面観察と14住の貼床の広がりから切合関係の確定をした。いずれの土坑も覆土内より弥生土器片が少量出土している。

## ウ ピット

A区2基、C区2基が検出された。土坑と同様、A区のP16・17は地山の凹凸を遺構として捉えた可能性がある。C区のP18・19は流失により上部を削られるが掘り込みは鮮明で、本来は近接する13住の屋内ピットであった可能性が高い。とりわけP19は掘り込みが深く、13住の支柱穴の一つと考えたい。

## エ 溝状遺構

### (ア) 第1号溝状遺構

A区北端で検出され、やや湾曲しながら東西に走る。幅30cm内外、延長3.6m、深さ5cmを測り、断面形は緩やかな曲線を描く。遺物の出土は見られない。

### (イ) 第2号溝状遺構

D区北端で検出され、北西―南東方向に走る。幅55～75cm、深さ15cm、東側を河床礫で失い、西側は河床礫層に没する。黄褐色土層を掘り込み、比較的平坦な底面からなだらかに壁面が立ち上がる。北側の壁には円形の小ピットがある。覆土中からは弥生時代中期後半の土器片が少量出土した。

## (2) 女鳥羽川遺跡 (第5図)

### ア 住居址

#### (ア) 概要

第6次調査地点から2棟が検出された。このうち1棟(2住)は第5次調査区に広がっているが、5次調査の時点では住居址存在の可能性を認めつつも、限られた調査範囲の中で明確にそれを捉えることができなかった。いずれも地山の黄褐色土を掘り込み、弥生時代中期後半の遺構と推定される。

#### (イ) 第1号住居址

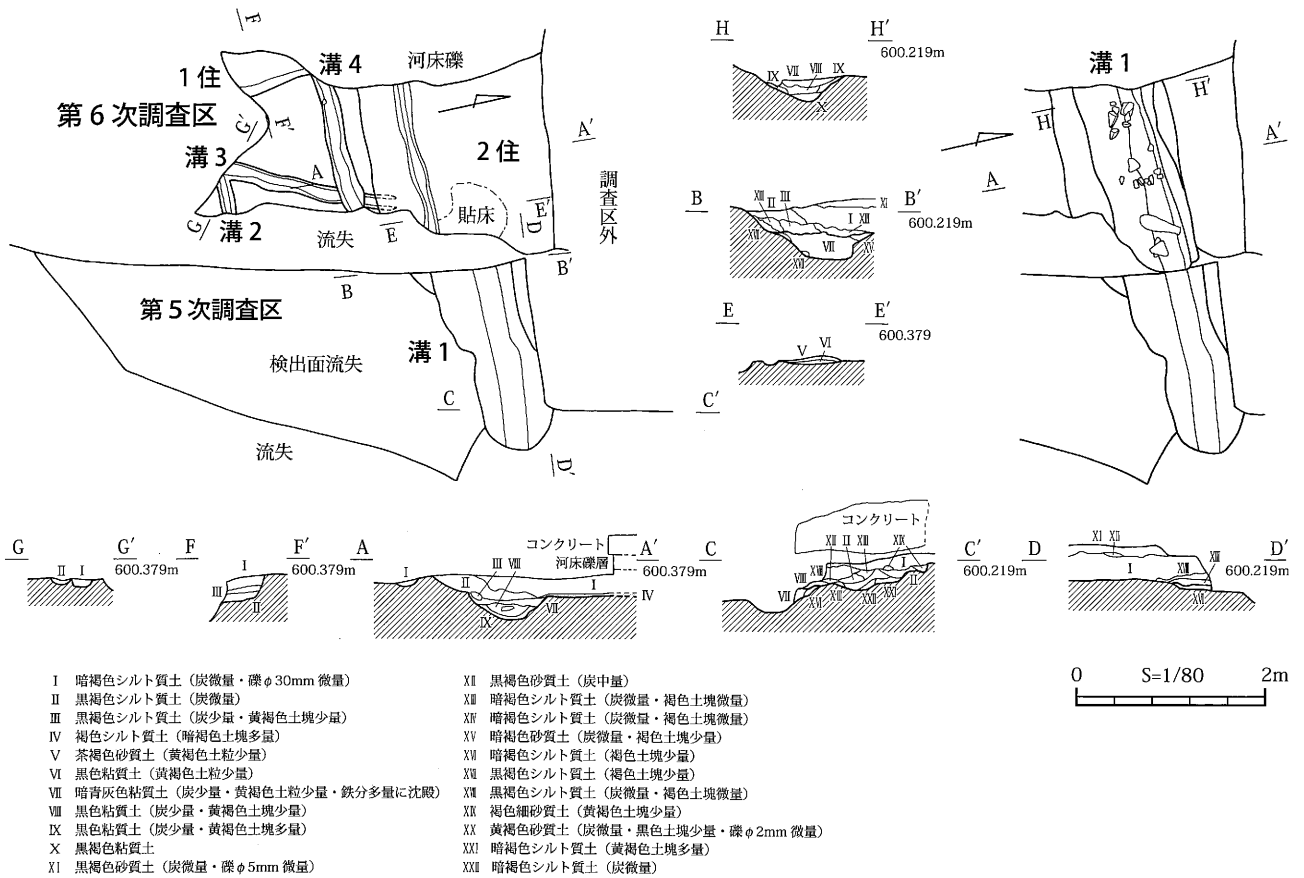
調査区南西隅にあり、東壁と床面のごく一部を除き、河床礫で破壊され、遺構の全貌はわからない。わずか70cm程を残す東壁は直線的で、垂直に20cm程立ち上がる。床面は明瞭である。覆土は3層の堆積が認められ、少量の弥生土器片、擦り切り石器等が包含されていた。

#### (ウ) 第2号住居址

第6次調査で遺構の南東部にあたる南北1.9m×東西2mの範囲を調査した。また、第5次調査区にかかる部分については壁・床の確認こそできなかったものの、土層の把握と層位毎の遺物の採集を実施した。

本遺構は南側で先行する溝1を貼っている。南壁は緩くダラダラと掘り込まれ、深さ20cm程を測る。調査範囲が狭く、壁付近を流失した5次調査ではこれを溝1の南壁と区別できなかった。平面形と断面観察の結果から、第5次調査地点はおおむね東西に長い楕円形住居跡の南東隅にあたるものと推定され、曲線を描きながら東壁へと移行していくものと考えられる。床面は黄褐色土を薄く平坦に貼り、固く叩き締める。しかし、溝1との重複部分は軟弱なためか、床面はやや沈み込んでいる。また一部では、あたかも溝の覆土であるシルトが2住の貼床上に噴出したため、これを叩き締めて補修したかのようなマウンド状の高まりがみられた。溝1の埋没後さほど時間を経ずに本遺構が構築されたものと推察される。

床面上の諸施設としては壁下に周溝が巡る。調査範囲内では柱穴は見当たらない。覆土は壁際堆土と中央



第5図 女鳥羽川遺跡検出遺構

部での色差が明瞭で、調査当初は遺構の重複の可能性も考えた。いずれも遺物は上層から下層まで土器片、石器類が含まれていたが、一括資料は見当たらない。

出土遺物は土器(壺・甕)、石器(太形蛤刃石斧、打製石斧、敲き石等)がある。太形蛤刃石斧は遺構検出面で採集したものである。不明鉄器片は調査範囲中央部の覆土中から出土した。

### イ 溝状遺構

#### (ア) 第1号溝状遺構

第5次調査区から第6次調査区へ東西走る溝状遺構である。全域で上部を2住に破壊されるが、位置的には住居址の南壁とほぼ同じ位置を平行に走る。2住構築時に本址が意識されている印象を受ける。

残存部分での掘り込みは幅70cm～1m、延長4.1m、検出面からの深さ45cm(2住床面から25cm)を測る。傾斜の強い壁面と幅狭な底面により断面形は逆台形を呈する。底面のレベルは東西でほとんど差がない。壁・底面はともに明瞭な面をなし、流水等による浸食は見られない。覆土は壁際に黄褐色土塊を含む暗褐色土が薄く見られるほか、中央部は粘性の強い青灰色シルトが厚く堆積する。この層中には10～50cm大の礫が底面から浮き上がった状態で散在し、その周辺に壺等の大形破片が遺存していた。

出土遺物は土器(壺・甕)がある。土器の様相から本遺構は弥生時代中期後半に帰属するものと推定される。

#### (イ) 第2～4号溝状遺構

2住の南側には黄褐色土層を10cm程度掘り込む幅15～20cmの浅い溝3条があった。弥生中期後半の集落址にしばしばみられ、垣根等の掘り方と推定されている布掘り溝と称される遺構である。2住と平行に東西走る溝2・4、南北走る溝3があり、いずれも重複している。溝3は2住および溝4に切られていることが確かめられた。覆土中には弥生土器などの遺物が少量含まれ溝4からは石鏃が見つかった。

### 3 遺物

#### (1) 土器 (第6～8図、第2表)

今回調査では基本的に、弥生土器のみの出土であるので、土器とは弥生土器を指すものとする。38点を図化提示、30点を拓影で提示できた。

##### ア 器種・器形・紋様

壺形土器 (以下「形土器」は略す)、甕、台付甕、鉢の4器種が認められる。

##### (ア) 壺

全形を把握できるものはないが、実測図は第6・7図1～3・27～29・32～35・37、拓影は第8図44～48・53・54・62～67が該当する。口縁部形態が判明するものは、大きく外反する口縁を持つ壺Aが1～3・32・33、翼状 (受け口) 口縁の壺Bが37である。紋様帯は、口唇部、口縁部、頸部、胴部上半、胴部中位に認められ、

口唇部：縄紋 (2・3・32・33)、縄紋+刻み (1)

口縁部：縄紋 (37)

頸部：1から2条の凸帯+縄紋 (2・29・32・34)、篋描横線 (3・65)、縄紋+篋描横線 (33)、櫛描紋 (28)

胴部上半：横走る篋描横線 (44)、篋描横線+山形紋 (34・63)、篋描横線+櫛描紋 (64)、櫛描+篋描 (篋刺突含む) の懸垂舌状紋 (46・47・53・54・62・67)

胴部中位：篋描連弧紋 (48・63)、篋描連弧紋+櫛描連弧紋 (35)

という状況で、特に胴部上半紋様帯が多様性に富む。篋描紋の横線と山形紋、櫛描横線と波状紋、篋描紋と櫛描紋の混ざった懸垂舌状紋が主な紋様構成である。縄紋は単節LR横転がしがほとんどを占めている。65には外面全面に赤彩がみられる。

##### (イ) 甕

全形を把握できるものは小形の第7図23の1点しかないが、かなり残存度が良いものがあり、形態・紋様構成を窺い知ることができる。口縁部は、頸部から短く外反する甕A (6・7・9～12・21～24・36・38・55)、やや内湾気味になる甕B1 (56)、大きく張り出して受け口状 (翼状) になる甕B2 (8・30・57) の3者がみられる。最大径は口唇部または胴部中位にある。紋様帯は口唇部、頸部、胴部上半に、さらに甕Bは口縁外面にも紋様帯があり、

口唇部：縄紋 (12・21・23・36・38・55)、縄紋+刻み (6・7・9～11・22・24：刻みは篋描原体を基本とするが、櫛描原体・縄紋押捺も含む)

口縁部：櫛描波状紋 (8)、縄紋+櫛描波状紋 (30・56・57)

頸部：櫛描横線 (10・24・58)、櫛描波状紋 (8)、櫛描簾状紋 (30)

胴部上半：櫛描波状紋 (10・25・39・43・59・61)、櫛描波状紋+櫛描垂下紋 (30・31・40・50)、櫛描縦羽状または斜条痕紋 (6～9・11～14・22～24・41・42・49・51・52・58・60)

胴部中位：紋様帯下端に刻み・刺突 (6・31・39・50・59)

という状況で、壺よりは類型が少ない。頸部紋様帯を持たないものが多く、櫛描簾状紋を採用しているのは30の1個体しか見当たらなかった。また、胴部に櫛描波状紋が重ねられるものは、おそらく、すべて櫛描垂下紋を持っていたものと推定され、垂下紋には円形浮紋が伴っているもの (30・50) がある。縄紋は1点 (21) を除き、単節LR横転がしである。21は頸部下から横帯で櫛描波状紋・櫛描簾状紋・同波状紋・櫛描横線紋・同波状紋・同簾状紋と紋様の種類を違えて重ねている。櫛描垂下紋を伴う点は共通するが、他は在地の甕と紋様構成が大きく異なっており、北陸地方の小松式の影響を受けているものと推察する。

##### (ウ) 台付甕

第6図20を台付甕の脚部とみた。比較的に径が大きく、逆位にして甕の胴部下端にも見えるが、剥離痕

跡の状況から台付甕と判断した。内外面にミガキがある。

### (工) 鉢

非常に少ない器種で、第6図4・5の2点のみを提示できた。いずれも底部破片である。内外面に赤色塗彩がなされている。

## イ 土器群

### (ア) 岡の宮遺跡第12号住居址出土土器群 (1～20・39～43)

実測図で20点を、拓影で5点を提示できた。まとまった非常に良好な資料である。壺は一括品特に恵まれなかったが、甕に紋様構成を知り得るものがあり、特徴が窺える。甕の大部分を占める甕Aは、口唇部に縄紋と刻みがなされ、頸部紋様帯を持たないものが多い。古い要素と考えたい。

### (イ) 岡の宮遺跡第13号住居址出土土器群 (44～46)

拓影で3点を提示できたのみである。いずれも壺で、胴部上半に篋描横線の多段重ねと懸垂舌状紋があるのが窺える。

### (ウ) 岡の宮遺跡第14号住居址出土土器群 (21～26・47～50)

実測図で6点、拓影で4点を提示できた。まとまった良好な資料であろう。在地の典型的な甕(22～24)に外来的要素をもつ21が伴うことが判明したのは大きな成果と言える。壺は拓影のみで、胴部上半に懸垂舌状紋と篋描横線による横帯区画が存在している。

### (エ) 女鳥羽川遺跡第2号住居址出土土器群 (28～31・53～61)

実測図で4点、拓影で9点を提示できた。まとまった良好な資料であろう。28の壺には篋描横線で区画された隆帯が見られず、縄紋もなく、櫛描紋が配される点で、他の壺とは異質である。甕B(30・56・57)の口縁部紋様帯の櫛描波状紋は2本歯の原体が使われている。篋描原体(半截または多截の竹管凸面)の凹面を用いた平行沈線の可能性もある。28の壺や56の甕B1などから、時期的に他の土器群よりわずかに新しい要素があると考えられる。

### (オ) 女鳥羽川遺跡溝1出土土器群 (32～36・62～66)

実測図で5点、拓影で5点を提示できた。まとまった良好な資料であろう。調査所見では溝1は第2号住居址に切られており、本址出土土器群の方が層位的に古くなる。壺は篋描横線で多段を画すもの(34・63)、懸垂舌状紋のもの(62)の他に、櫛描横線と櫛描波状紋を横帯で重ねるもの(64・66)が見られる。

## ウ 土器のまとめ

全体的にみて、弥生時代中期後半の栗林式に相当することは疑いない。その中でも、以下の諸点に特徴がある。

- ・甕の頸部紋様帯に櫛描簾状紋を採用する個体が少ない。
- ・甕の口縁部形態として、甕Aが主体を占め、緩い受け口の甕B1は少なく、大きく翼状になる甕B2が存在する。
- ・甕の胴部紋様帯に櫛描波状紋を重ねるものは、櫛描垂下紋を伴う。
- ・甕の胴部紋様帯の下端に縦の刻み・刺突が巡る個体が一定の数で見られる。
- ・壺の口縁部形態として、壺Aが圧倒的で、壺Bは少数の存在である。
- ・壺の胴部上半に紋様帯を持つものが多い。

これらは、本資料が全体的に栗林式の中でも中段階(栗林2式)に位置付けられるものと考えられるが、中でも微妙な時期差も想定できる。市内遺跡での弥生時代中期後半の土器群と比較すると、県町遺跡、百瀬遺跡の出土土器群より古く位置付けられ、松本市内出土の栗林式の中では最古級のものと言えよう。

参考文献 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌 99・100』 長野県考古学会

第2表 実測・拓影弥生土器一覧

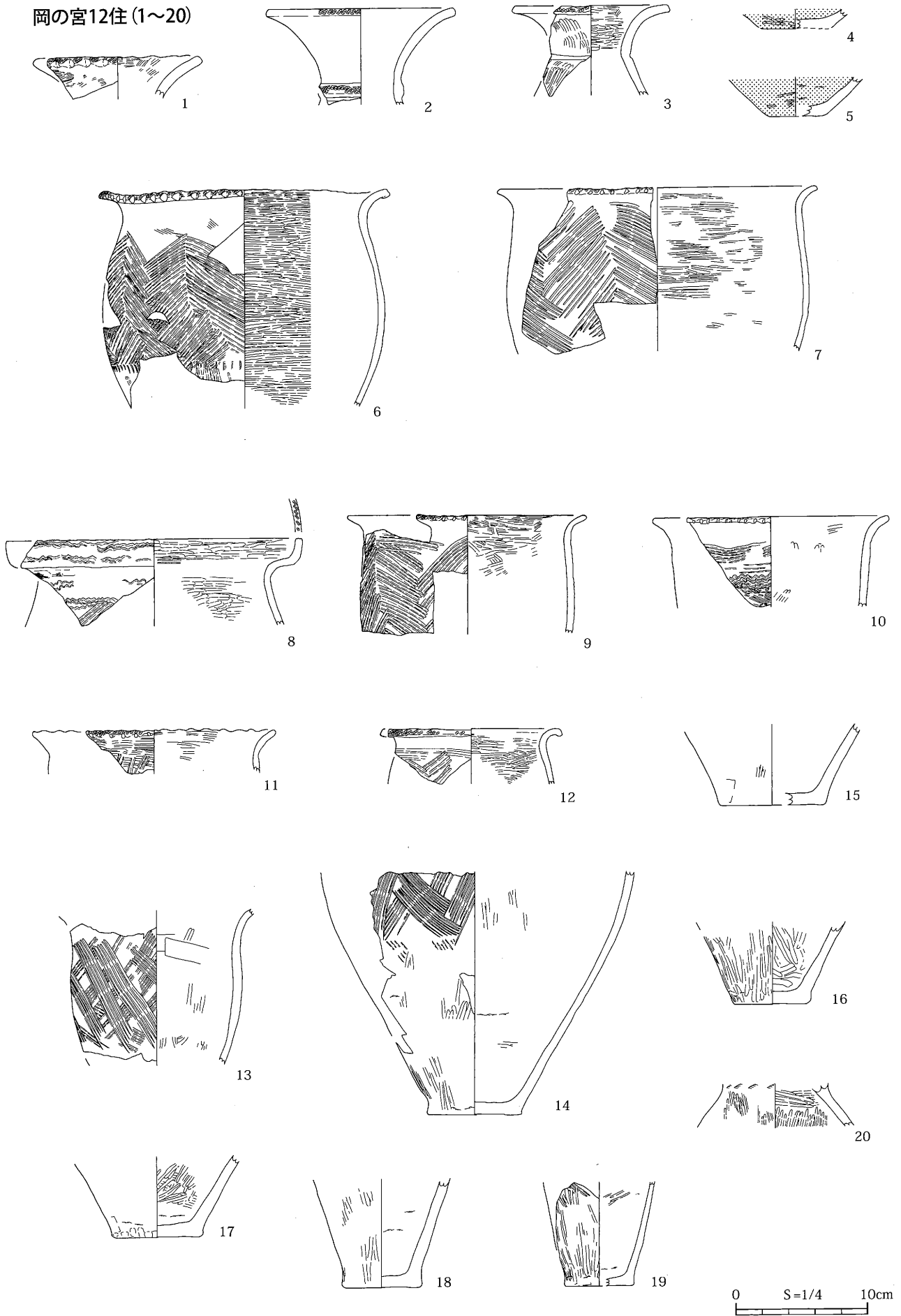
No.	地点	器形	口径	底径	残存度	外面調整・紋様	内面調整	実測番号
1	岡12住	壺A	12.8		口1/5	口唇縄紋LR後笠刻み、横ミガキ	横・斜ミガキ摩滅	12住-14
2	岡12住	壺A	14.4		口1/2	口唇縄紋LR、頸隆帯縄紋LR横	横ミガキ摩滅	12住-7
3	岡12住	壺A	12.0		口1/5	口唇縄紋LR、頸隆帯横線、縦ミガキ	口縁横ミガキ	12住-11
4	岡12住	鉢		5.3	底3/5	横ミガキ、赤彩	ミガキ、赤彩	12住-16
5	岡12住	鉢		4.6	底2/5	横ミガキ、赤彩	ミガキ、赤彩	12住-17
6	岡12住	甕A	22.2		口2/3	口唇折返し・縄紋LR後刻み、胴櫛縦羽状条痕下端部櫛刺突	横ミガキ	12住-1
7	岡12住	甕A	24.4		口1/12	口唇縄紋LR後刻み、胴櫛縦羽状条痕	横ミガキ	12住-4
8	岡12住	甕B	22.4		口1/6	口唇縄紋LR、口縁・頸櫛波状紋、胴櫛斜条痕	横ミガキ	12住-12
9	岡12住	甕A	18.2		口1/8	口唇縄紋LR後笠刻み、胴櫛縦羽状条痕	横ミガキ	12住-9
10	岡12住	甕A	17.9		口1/8	口唇笠刻み、頸櫛横線、胴櫛波状紋、地ハケメ	縦・横ミガキ摩滅	12住-8
11	岡12住	甕A	18.4		口1/10	口唇笠刻み後縄紋LR、胴櫛斜条痕	ハケメ状工具ナデ	12住-13
12	岡12住	甕A	13.8		口1/5	口唇縄紋LR、胴櫛縦羽状条痕	横ミガキ	12住-10
13	岡12住	甕			胴1/3	櫛格子状斜条痕	縦ミガキ摩滅	12住-6
14	岡12住	甕		7.2	底完	櫛縦羽状条痕、縦ミガキ	縦ミガキ摩滅	12住-5
15	岡12住	甕		7.7	底1/3	縦ミガキ摩滅	摩滅不明	12住-18
16	岡12住	甕		5.95	底完	縦ミガキ	縦・横ミガキ	12住-3
17	岡12住	甕		7.0	底2/5	ミガキ摩滅、工具ナデ	ハケメ後斜ミガキ	12住-20
18	岡12住	甕		6.1	底1/4	縦ミガキ	ミガキ摩滅	12住-19
19	岡12住	甕		5.0	底1/4	櫛斜条痕、縦ミガキ	横ミガキ摩滅	12住-15
20	岡12住	台付甕			脚1/3	ハケメ後縦ミガキ	横・縦ミガキ	12住-2
21	岡14住	甕A	18.4		口3/4	口唇縄紋RL、胴櫛波状紋・籬状紋・横線交互、櫛垂下	ハケメ後横・縦ミガキ	14住-1
22	岡14住	甕A	22.3		口1/8	口唇縄紋押捺の刻み、胴櫛縦羽状条痕	横ミガキ摩滅	14住-4
23	岡14住	甕A	15.0	7.0	口1/6	口唇縄紋LR、胴櫛縦羽状条痕、地ハケメ、底面ハケメ	横ハケメ	14住-2
24	岡14住	甕A	19.4		口1/6	口唇ハケメ原体または縄紋押捺の刻み、胴櫛斜条痕	斜ハケメ後横ミガキ	14住-3
25	岡14住	甕		6.2	底1/2	櫛波状紋、縦ミガキ	ハケメ後縦横ミガキ	14住-6
26	岡14住	甕		5.6	底1/4	縦ミガキ、工具ナデ	摩滅不明	14住-5
27	岡表探	壺		6.0	底2/3	摩滅不明	摩滅不明	表探-1
28	女2住	壺			胴1/4	頸櫛波状紋・横線、胴櫛波状紋	ミガキ摩滅	2住-4
29	女2住	壺			頸1/3	口縁ハケメ摩滅、頸隆帯2本縄紋LR横	ハケメ摩滅	2住-2
30	女2住	甕B	23.0		口1/4	口唇縄紋LR、口縁縄紋LR後櫛波状紋、頸櫛籬状紋、胴櫛波状紋後櫛垂下・円形浮紋	横・縦ミガキ	2住-1
31	女2住	甕			胴1/6	櫛波状紋後櫛垂下、下端部笠刻み、縦横ミガキ	工具ナデ	2住-3
32	女溝1	壺A	14.4		口1/6	口唇縄紋LR、頸隆帯2本縄紋LR横、櫛横線	横ミガキ摩滅	溝1-3
33	女溝1	壺A	12.2		口1/8	口唇縄紋LR、頸部縄紋LR横後笠横線	横ミガキ	溝1-5
34	女溝1	壺			頸完	頸隆帯縄紋LR横、籬横線、籬山形紋	ミガキ摩滅、ナデ	溝1-1
35	女溝1	壺			胴1/6	縄紋LR横、大きな櫛山形紋+笠沈線縁取り	横ハケメ、工具ナデ	溝1-2
36	女溝1	甕A	20.2		口1/10	口唇縄紋LR、櫛斜条痕	横ミガキ摩滅	溝1-4
37	女溝4	壺B	13.0		口1/8	口唇縄紋LR、口縁縄紋LR横、縦ミガキ	横ミガキ摩滅	溝4-1
38	女検	甕A	10.9		口1/5	口唇縄紋LR、口縁横ミガキ、胴縦ミガキ	工具ナデ摩滅	検-1
39	岡12住	甕			拓影	櫛波状紋、下端に笠刺突	ナデ	12住-4
40	岡12住	甕			拓影	櫛波状紋後櫛垂下後笠山形垂下	ナデ後ハケメ	12住-3
41	岡12住	甕			拓影	櫛縦羽状条痕	ナデ	12住-1
42	岡12住	甕			拓影	櫛縦羽状条痕	ナデ	12住-2
43	岡12住	甕			拓影	櫛波状紋	ナデ	12住-5
44	岡13住	壺			拓影	笠横沈線	ナデ	13住-1
45	岡13住	壺			拓影	縄紋LR横後笠横・山形沈線	ナデ	13住-3
46	岡13住	壺			拓影	櫛+笠懸垂紋、笠横線間に縄紋LR横	ナデ	13住-2
47	岡14住	壺			拓影	櫛+笠懸垂紋	ナデ	14住-3
48	岡14住	壺			拓影	笠沈線間に櫛横線、笠連弧紋	ナデ	14住-5
49	岡14住	甕			拓影	櫛斜条痕	ナデ	14住-2
50	岡14住	甕			拓影	櫛波状紋後櫛垂下、円形浮紋、紋様下端に笠刺突	ナデ	14住-1
51	岡土17	甕			拓影	櫛縦羽状条痕	ナデ	土17-1
52	岡検	甕			拓影	櫛縦羽状条痕	ナデ	検-1
53	女2住	壺			拓影	笠沈線・押しき刺突による懸垂	ナデ	5-2住-3
54	女2住	壺			拓影	櫛+笠懸垂紋、櫛横線	ナデ	6-2住-2
55	女2住	甕A			拓影	口唇縄紋摩滅、櫛縦羽状条痕	ナデ	5-2住-2
56	女2住	甕B			拓影	口唇縄紋LR、口縁縄紋LR横後櫛波状紋	ナデ	6-2住-3
57	女2住	甕B			拓影	口唇縄紋LR、口縁縄紋LR横後櫛波状紋	ナデ	6-2住-1
58	女2住	甕			拓影	頸櫛横線、胴櫛縦羽状条痕	ナデ後ハケメ	6-2住-4
59	女2住	甕			拓影	櫛波状紋、下端に笠刺突	ナデ	5-2住-5
60	女2住	甕			拓影	櫛斜条痕	ナデ	5-2住-1
61	女2住	甕			拓影	櫛波状紋、ナデ	ナデ	5-2住-4
62	女溝1	壺			拓影	櫛+笠懸垂紋、笠押しき刺突、籬山形懸垂	ナデ	6溝1-4
63	女溝1	壺			拓影	笠横線、横線間に縄紋LR横後笠山形、笠連弧紋	ナデ	6溝1-1
64	女溝1	壺			拓影	笠横線間に櫛横線、下部に櫛波状紋・横線	ナデ	6溝1-2
65	女溝1	壺			拓影	頸笠横線2本、ミガキ、全面赤彩	ナデ	6溝1-3
66	女溝1	壺			拓影	櫛波状紋、櫛横線、櫛大きな波状紋	ナデ	5溝1-1
67	女溝4	壺			拓影	櫛+笠懸垂紋、笠押しき刺突で縁取り	ナデ	6溝4-1
68	女包含	甕			拓影	櫛波状紋	ナデ	5包含層1

※岡の宮遺跡は「岡」、女鳥羽川遺跡は「女」と略記した。

※櫛描紋は「櫛」、笠描紋は「笠」と略記した。

※口唇部は「口唇」、口縁部は「口縁」、頸部は「頸」、胴部は「胴」と略記した。

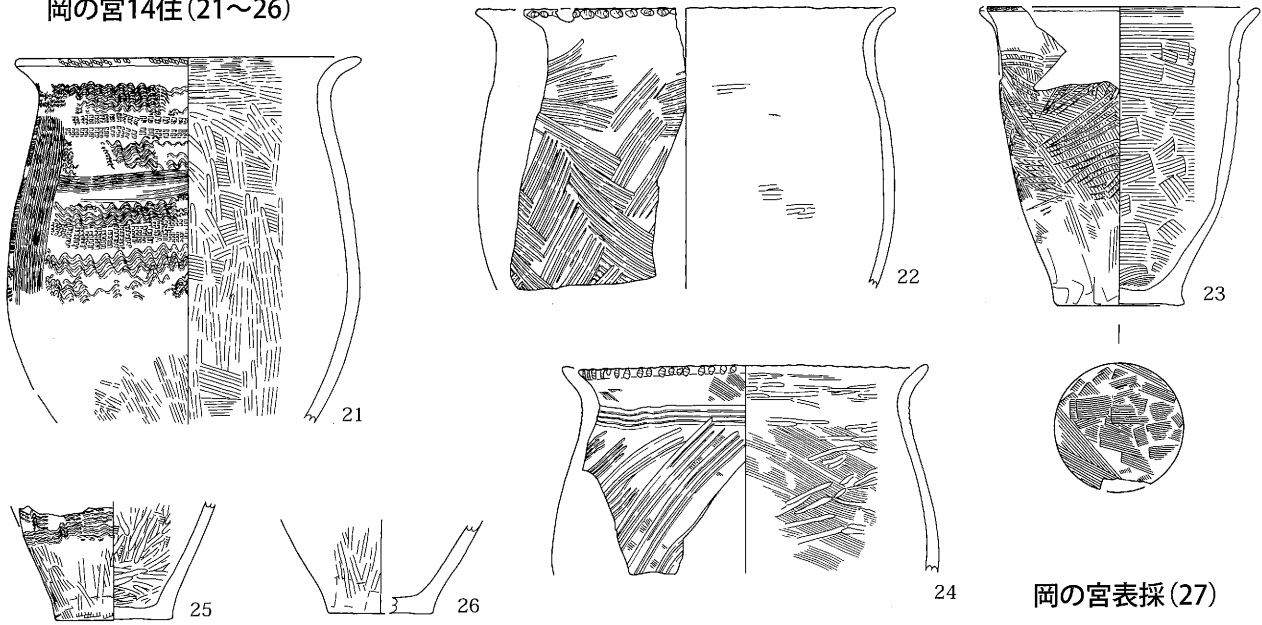
岡の宮12住(1~20)



第6図 出土弥生土器(1)



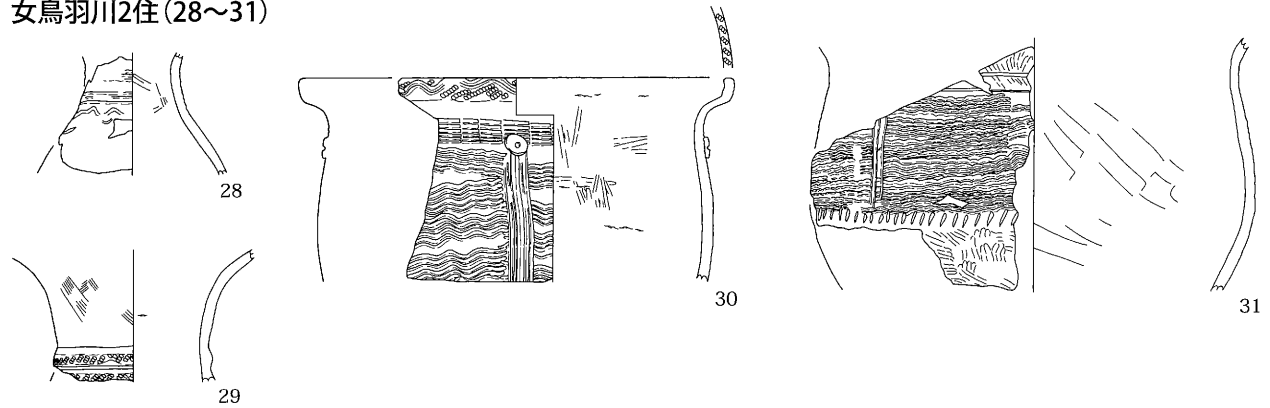
岡の宮14住(21~26)



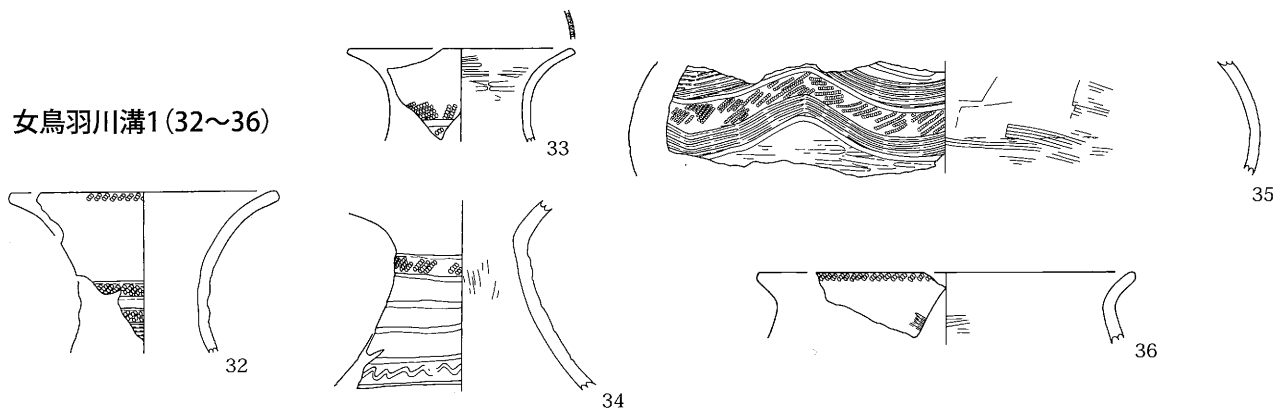
岡の宮表採(27)



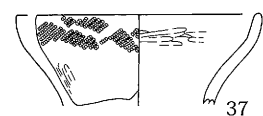
女鳥羽川2住(28~31)



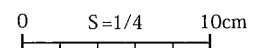
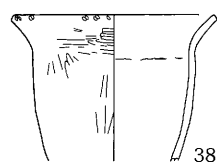
女鳥羽川溝1(32~36)



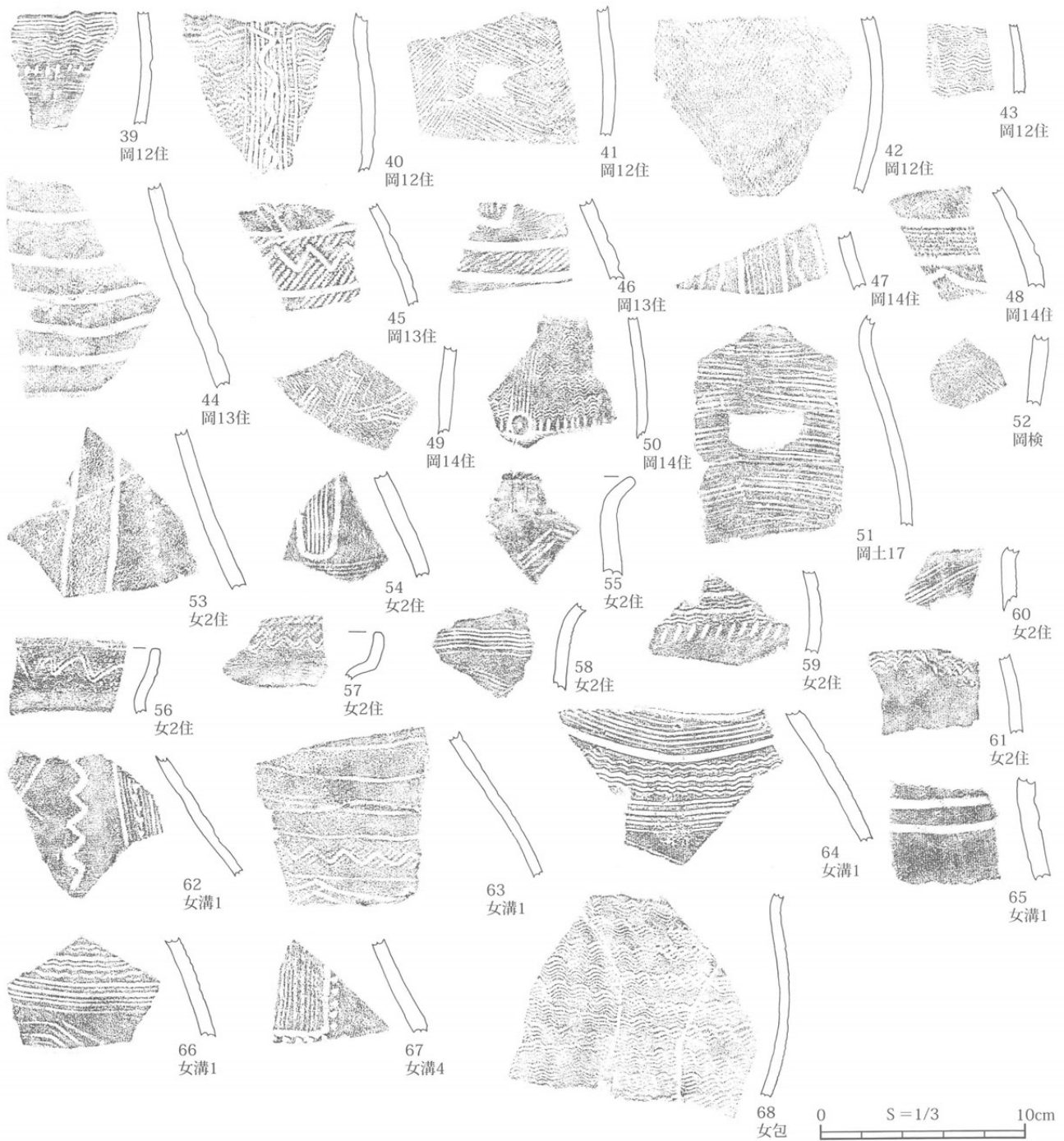
女鳥羽川溝4(37)



女鳥羽川検出面(38)



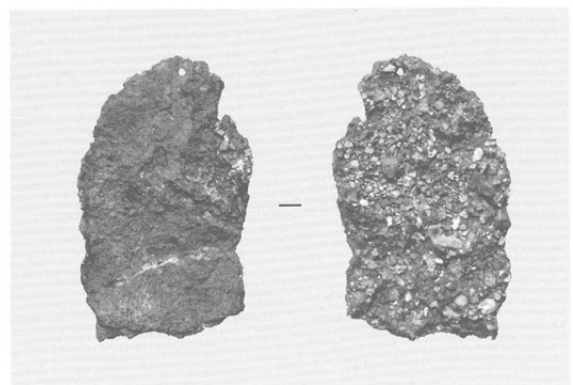
第7図 出土弥生土器(2)



第8図 出土弥生土器 (3)

(2) 鉄製品 (第9図)

女鳥羽川遺跡2住の覆土中から、器種不明の鉄製品片が1点出土している(写真)。松本市域では希少な出土例の弥生時代鉄器であるが、本資料は欠損が著しく原形が判然としないため、必ずしも良好な資料とはいえない。錆を除く長さ3.8cm・幅2.3cm・厚さ1mmの板状を呈し、四辺を欠損するうえに表面も大半が剥離している。裏面は錆とともに覆土中の砂が固着し、除去困難なため器面の状況はわからない。



第9図 出土鉄製品 (S=1/1)

### (3) 石器 (第10・11図、第3表)

本節では女鳥羽川遺跡第5次・6次調査・岡の宮遺跡2次調査において出土した石器及び石製品を扱う。該当資料は117点で、定型的な石器を中心に17点を図示した。石材鑑定は森義直氏にご教授頂いた。石材は黒曜石が75点で半数以上を占め、残りを泥岩・砂岩・凝灰岩・安山岩等で構成する。器種組成は磨製石斧・磨製石鏃など弥生時代に特徴的な資料が多い。以下、観察表では記載できない部分について述べる。

1・2は石核である。3点が出土し全て黒曜石製である。1は上下端に潰れを伴うことから台石の利用が考えられる。3～5は石鏃である。4は表裏両面に減厚目的の研磨痕跡と折り取りの為に擦り切り痕跡2条が観察される。意図しない部分で破損しており、作業途中で破損、廃棄されたものと考えられる。5は素材を半割後、剥離により形状を整えている。研磨痕跡は確認できない。6は細粒凝灰岩製の石錐と考えられる。周縁全体を加工し、つまみ部と錐部を作出している。先端部を欠損し、使用痕跡は確認できない。7・8はRF・UF類である。10点が出土し黒曜石が7点、3点が泥岩を素材とする。7は珪質泥岩製のRFで12住内から同一石材の剥片が数点出土しているが石核は確認できなかった。9は泥質片岩製の打製石斧で3分の1程度を欠損している。器体の一部に顕著な磨耗痕跡を伴い、短軸方向の線状痕が確認される。刃縁に磨耗痕跡は確認されなかった。10は砂岩製の擦り切り石器である。剥離により擦り切り痕跡はほとんど確認できないが、刃部稜上の一部に磨耗痕跡が確認される。11は砂岩製の有肩扇状形石器の破片である。二次加工により末広がり形状を作り出している。刃部に使用痕跡は確認できない。12は砂岩製の敲き石で下端部は敲打により変形している。器体中央には斜め方向に伸びる凹痕跡が観察される。石質が粗く磨痕は確認できなかった。13～15は磨製石斧である。13は完形の扁平片刃石斧である。側縁に敲打痕跡を残している。15は閃緑岩製の太形蛤刃石斧で基部周辺に敲打痕を残す。研磨痕跡は胴部では右肩下がり、刃部では左肩下がりが主体的である。磨製石斧や磨製石鏃に対応する砥石は破片資料数点のみで良好な資料は検出されなかった。17は軟質凝灰岩製の紡錘車である。断面が薄身で台形を示しており、形態的特長から弥生時代に属するものと判断した。

#### 参考文献

神村 透 1997 「弥生時代の石器を見て」『和手遺跡 - カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ - 』

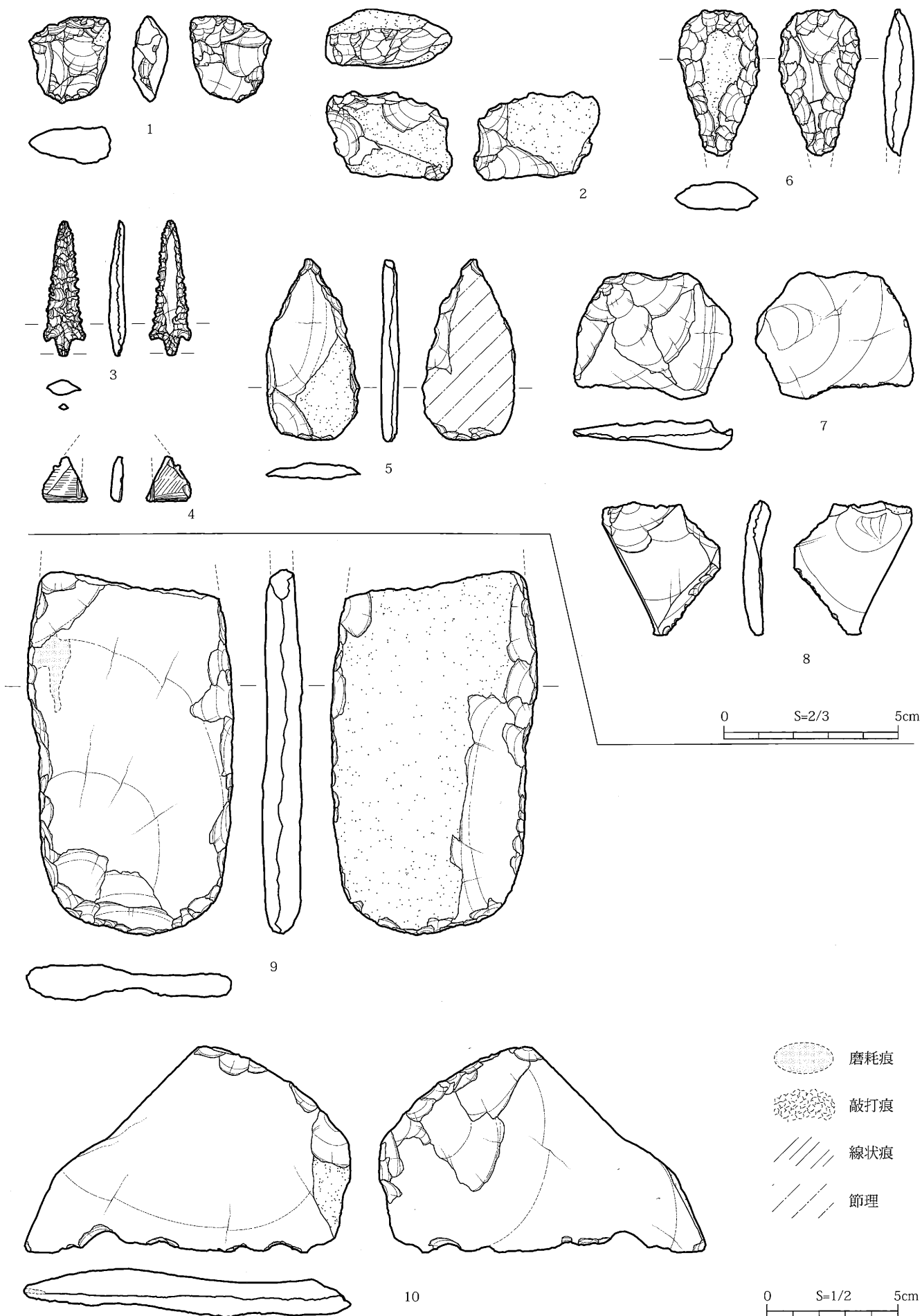
町田勝則 1999 第5章2節1「石器」第5章2節4「考察」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12

榎田遺跡 第2分冊』

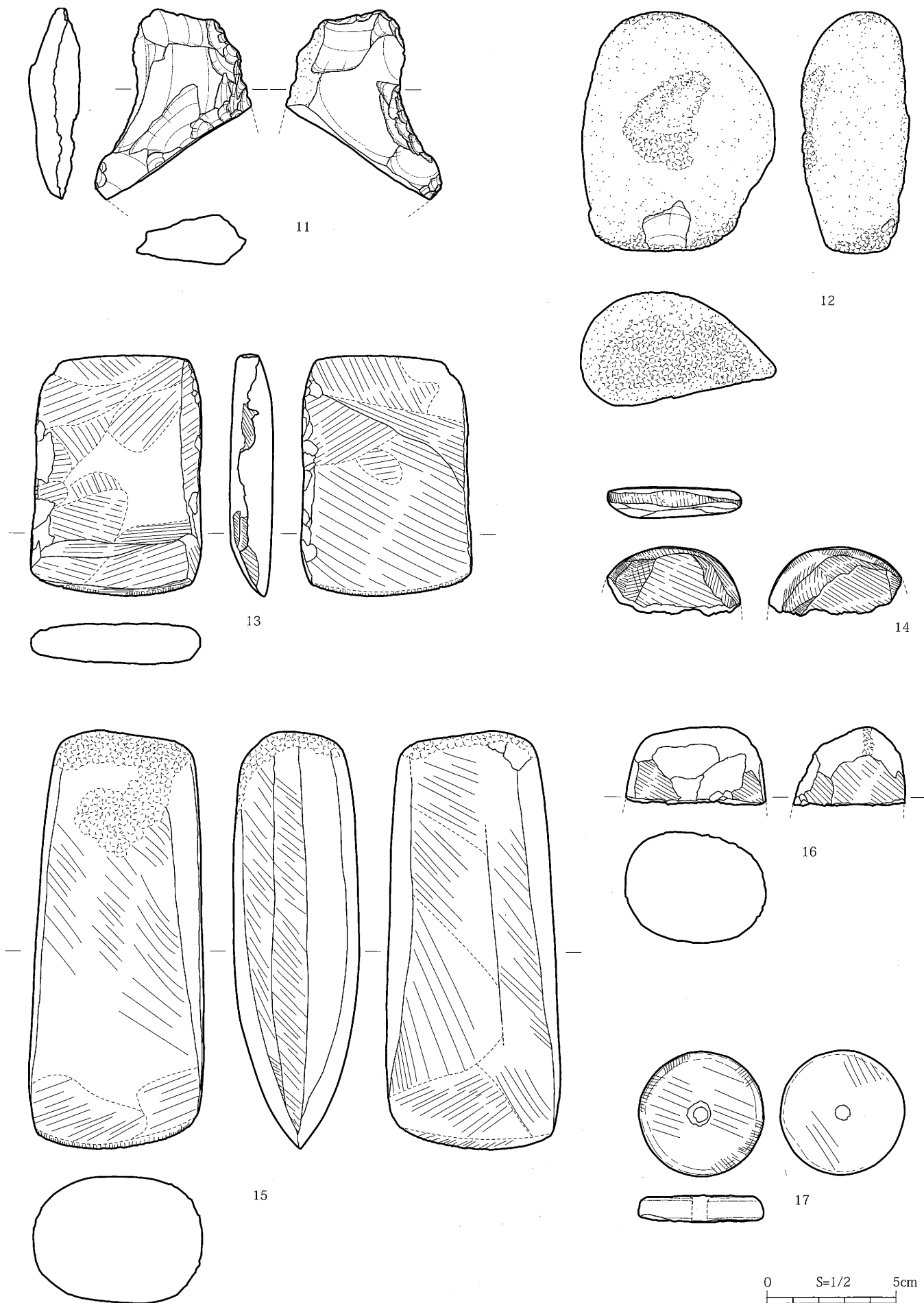
第3表 出土石器一覧

図版No.	出土遺跡	出土遺構	器種	細別	石材	使用痕	備考	重量	器長	器幅	器厚
1	岡の宮	12住	石核		黒曜石			5.0	24.6	23.2	10.6
2	女鳥羽川	検出面	石核		黒曜石			9.8	25.6	36.2	17.3
	"	1住	石核		黒曜石			3.6	16.2	18.0	14.0
3	"	溝4	石鏃	凹基有茎	黒曜石		先端欠け 鋸歯縁	1.3	38.6	11.9	4.8
4	"	検出面	磨製石鏃未成品		珪質細粒凝灰岩			0.6	(12.9)	(12.9)	3.5
5	岡の宮	12住	磨製石鏃未成品		粘板岩			7.4	52.3	27.1	5.6
6	"	12住	石錐		珪質細粒凝灰岩		先端欠け	8.6	42.2	23.8	9.0
7	"	12住	RF		珪質泥岩			13.5	36.8	45.7	8.9
8	女鳥羽川	2住	UF		珪質泥岩			6.2	38.3	33.8	8.0
9	"	2住	打製石斧	短冊型	泥質片岩	磨	基部欠損	248.9	(139.5)	79.7	15.5
10	"	1住	擦り切り石器		砂岩	磨		147.9	78.6	125.2	19.0
11	岡の宮	12住	有肩扇状形石器		砂岩		刃部欠損	65.4	(73.9)	(60.5)	20.1
12	女鳥羽川	2住	磨石類	敲き石	砂岩			341.8	93.6	74.5	42.5
	"	表採	磨石類	磨石	砂岩	凹		283.1	118.5	72.0	26.6
	"	5次遺構層理面	磨石類	敲き石	安山岩	敲		700.3	114.2	92.2	55.2
	岡の宮	14住	砥石		砂岩	磨	破片	13.8			
	女鳥羽川	溝1	石皿		安山岩	磨	被熱 破片	198.5			
13	岡の宮	14住	磨製石斧	扁平片刃	斑レイ岩			185.3	93.4	66.5	17.2
14	"	14住	磨製石斧	扁平片刃	蛇紋岩		基部破片	24.5	(25.8)	(51.6)	(12.1)
15	女鳥羽川	2住	磨製石斧	太形蛤刃	閃緑岩			943.7	161.9	67.3	49.0
16	岡の宮	14住	磨製石斧	太形蛤刃	閃緑岩		基部破片	108.0	(30.1)	(54.8)	(43.7)
17	"	表採	紡錘車		凝灰岩			27.6	48.9	48.6	10.2

( )は残存値を表す



第10圖 出土石器(1)



第11图 出土石器(2)

## IV まとめ

今回の岡の宮、女鳥羽川両遺跡における発掘調査では次の成果を得ることができた。

- 1 女鳥羽川河川敷において弥生時代の遺構・遺物の分布を初めて確認した。
- 2 調査から判明した弥生時代遺構の分布範囲は少なくとも南北 200m にわたり、特に北側では遺構・遺物の希薄な A 区が北限付近とみられた。また、地形・地質の状況からみても岡の宮遺跡 A 地区から女鳥羽川遺跡第 5・6 次調査地点までは連続しているものと考えられた。
- 3 現在の女鳥羽川の河道は、少なくとも遺跡の廃絶以後に位置が定まったものである（平成 18 年の元町橋下表面採集遺物に須恵器片があることから正確には古代以降）。
- 4 5 箇所の調査地点からは弥生時代中期後半の竪穴住居址 4 棟ほか、土坑、ピット、溝状遺構等を検出し、土器、石器等の良好な出土遺物が得られた。河床に現れたわずかな範囲にも関わらず遺構の出現率は高く、分布範囲からみても相当の規模・密度を有する集落址であることが窺えた。
- 5 女鳥羽川遺跡第 5 次調査地点では人為的な築造による大形の溝状遺構が検出された。掘り込みや堆積の状況から流路ではなく、環濠も含めた何らかの区画溝としての性格が濃厚である。
- 6 弥生時代集落址は出土土器から中期後半の単一時期に収まるが、遺構の重複関係からある程度の時間幅を有している。

以上、今回の発掘調査はこれまで未確認だった弥生時代集落址を南北に貫く格好となり、おぼろげながら集落の実態に迫ることができたといえる。その状況から集落の範囲が女鳥羽川の東西にも広がっていることは明らかで、今後はこれまで捉えてきた岡の宮遺跡、女鳥羽川遺跡、加えて横田古屋敷遺跡についてその範囲・内容を再検討する必要がある。特に弥生時代集落址としては岡の宮遺跡や女鳥羽川遺跡よりも横田古屋敷遺跡との一体性を考えた方がよいのか、十分な検討が必要である。これについては、松本城および城下町整備に際して改修が行われたといわれる女鳥羽川の旧流路がどうなっていたのかも絡んでくる。今後の追求の方向性として具体的に列記するならば以下のとおりであろう。

- 1 今回新たに確認された弥生時代集落址を新発見の遺跡とし、岡の宮遺跡をこれまでどおり女鳥羽川以西に存する古墳時代前期・古代を主体とする遺跡として別に考えるべきか。
- 2 女鳥羽川遺跡を従来どおり桜橋上流側を中心とした縄紋時代後晩期主体の遺跡として捉え、第 5・6 次調査地点については除外すべきか。
- 3 弥生時代集落址については、横田古屋敷遺跡と一連のものか。
- 4 上記 1～3 の遺跡観を大きく左右する女鳥羽川の変遷や改修の歩みの具体像は。

最後に、今回の調査については河川災害復旧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、女鳥羽川遺跡とならんで松本市内では実施事例の少ない河川敷の調査となった。加えて、河流による自然流失への対処としては初となる市単事業としての記録保存を実施した（女鳥羽川第 5・6 次調査、岡の宮遺跡 D 地区）。この一連の調査はわずかな渇水期を利用して実施し、その時点としては精一杯の対応であった。しかしながら、遺跡の中央を貫く河床のわずかに下に遺構面が残存していることが裏目となり、増水を繰り返すたびに浸食を受け遺構・遺物が流失する事態を繰り返している。今回は河川災害復旧工事に伴う河流の遮断があったこともあり、運よく調査を実施することができたが、今後こうした事態にどのように対処していくべきか、課題を投げかける結果ともなった。

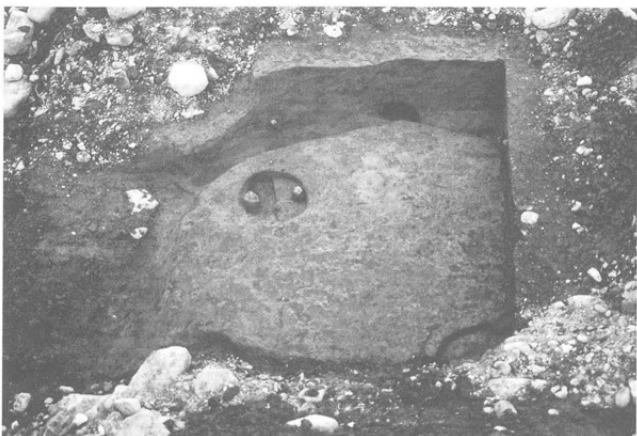
最後に、今回の調査から報告書作成にあたりご理解とご協力を賜った長野県松本建設事務所 奈良井川改良事務所をはじめとする関係各位に謝意を表して結びとしたい。



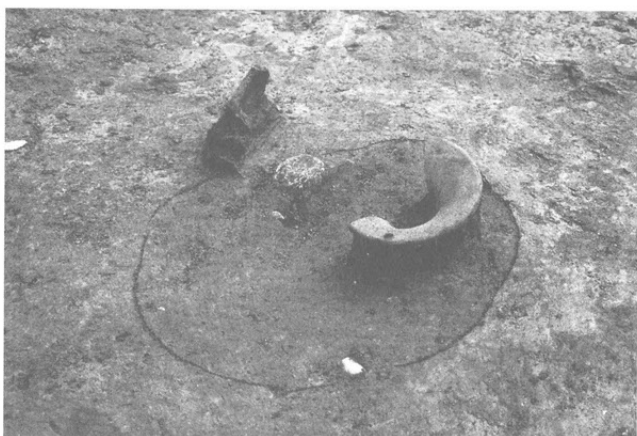
岡の宮遺跡第2次調査地点遠景（南から）



女鳥羽川遺跡第6次調査地点遠景（南東から）



岡の宮遺跡B地区 12住（西から）



同左 遺物出土およびピット検出状況（南から）



岡の宮遺跡D地区 14住（東から）



女鳥羽川遺跡 2住（東から）



女鳥羽川遺跡 1住・溝1～4（南西から）



同左 溝1（第5次調査・南東から）

岡の宮遺跡第2次発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしおかのみやいせきだい2じはつつつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市岡の宮遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.193							
編著者名	竹原 学・直井雅尚・横井 奏							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市大手3-8-13 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2008(平成20)年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
おかのみや 岡の宮	ながのけん 長野県 まつもとし 松本市	20202	496	36度 14分 36秒	137度 58分 50秒	20070507 } 20070528	31.8  6.9	県単河川 災害復旧 工事
めとぼがわ 女鳥羽川	ながのけん 長野県 まつもとし 松本市	20202	156	36度 14分 32秒	137度 58分 48秒	20060906 } 20060923 20070507 } 20070528	7.9	河川浸食 による自然 崩壊
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岡の宮	集落址	弥生	竪穴住居址 土坑 ピット 溝状遺構	3棟 5基 4基 2条	土器 石器	弥生中期後半の集落址 の中心部付近を調査した。 その範囲は女鳥羽 川遺跡にかけて大きな 広がりをもつことが判 明し、東西方向にも拡 大していることが予想 された。		
女鳥羽川	集落址	弥生	竪穴住居址 溝状遺構	2棟 4条	土器 石器 鉄製品			
要約	<p>岡の宮遺跡は、松本市街地の北西寄り、岡宮神社を中心とした地域にある遺跡で、これまで古墳時代前期と平安時代の遺跡として知られていた。女鳥羽川遺跡は岡の宮遺跡の南、女鳥羽川の河床で発見された縄紋時代後晩期の遺跡として古くから知られる。</p> <p>今回の調査は、市街地の東を南流する女鳥羽川の河川敷を調査したもので、両遺跡の縁辺にあたる位置にある。しかし調査の結果、両遺跡にまたがって弥生時代中期後半の遺構が分布し、新発見の弥生集落址が調査地一帯に存在することが判明した。</p> <p>今回の調査で検出された遺構は竪穴住居址、土坑、ピット、溝状遺構である。竪穴住居址は全形の判明するものはないが、当該期に通例の楕円形プランで地床炉を有するものである。溝状遺構は女鳥羽川遺跡調査地点から区画溝の可能性のあるやや大形のものが出され、その周囲には細く浅い布掘り溝が集中していた。</p> <p>出土遺物の大半は弥生土器で、栗林式期に位置づく壺、甕などがある。石器は点数が少ないが、打製石鏃、磨製石鏃未成品、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、打製石斧、有肩扇状形石器、紡錘車など、器種は豊富である。女鳥羽川遺跡2住からは小片ながら鉄製品が出土した。当該期の希少な出土例である。</p>							

松本市文化財調査報告 No.193

長野県松本市 岡の宮遺跡

第2次発掘調査報告書

発行日 平成20年3月21日

発行 松本市教育委員会

〒390-0874 長野県松本市大手3-8-13

印刷 藤原印刷株式会社